南種子町河内の貝化石層（みなみたねちょうかわち　かいかせきそう）

分類：天然記念物（地質・鉱物）
県選択文化財：平成 **23** 年 **4** 月 **19** 日指定

約 1300 万年前、河内一帯は内湾で干潟が広がっていました。そこに生息していた生物が化石となったのが、この河内の化石群です。発見当時は、この地層が広範囲にわたり露出しており、化石群を露頭全体で見ることができました。

河内の化石群は、茎永層群河内層に含まれており、示準化石ヴィカリア（Vicarya callosa japonica Yabe and Hatai）が見つかっていますので、中新世中期の約 1300 万年前の海成層であることがわかりました。この時期の地層は、南九州では種子島の茎永層群でしか確認されていません。

河内の化石群には、泥干潟に「カキ礁」を形成した大量のマガキの化石と、潮間帯から潮下帯の砂底に住むゴカイ類の巣穴（生痕）化石が見つかっています。

このことから当時の海は、泥干潟であった時期、砂浜の浅海であった時期が繰り返されたことがわかりました。他にもサルボウ・ウミニナ・ハナガメ等の化石が見つかっています。

とくに陸に住むハナガメの化石は琉球列島形成前のもので、中新世中期以降の古地理（琉球列島形成史）と生物地理区の変遷を知るうえで極めて貴重な化石標本です。また、地球がダイナミックな構造運動を行っている証拠である断層も見つかっていて、種子島の成り立ちを研究するうえで、河内の化石群は極めて重要です。

調査風景

ハナガメの化石